

ジョン・ゾーンの作風形成におけるアメリカ前衛演劇の影響  
—ゾーン/フォアマンによるオペラ《Astronome》を例に—

後藤 孝典 (関西学院大学)

アメリカの音楽家ジョン・ゾーン (John Zorn, 1953-) は、1970年代から生地ニューヨークのロウアー・イースト・サイドを拠点に活動を開始した。サクソフォン奏者、インプロヴァイザー、映画音楽、現代音楽の作曲家、クレズマーバンドなど、その活動は多岐にわたる。ロウアー・イースト・サイドでは、1970-80年代にかけて「分裂症的折衷主義 (Schizo- Eclecticism)」的性格を共有した若い音楽家が同時多発的に出現したが (Stone; 1996)、質・量ともにゾーンは中心的存在といえるだろう。

ゾーンはその作風の影響源として無数の作曲家の名前を挙げてきたが (Zorn; 1993)、そのことは活動の広範さとともに、彼の実態の捉え難さの一因となっている。彼について、代表作である《コブラ》(1984)をはじめとする80年代の一連のゲーム形式の即興演奏や、ファイル・カード・コンポジションと呼ばれる手法が生み出すコラージュ構造から、しばしば「ポストモダンの」と評されてきた。その一方、活動初期には Theatre of Musical Optics と呼ぶパフォーマンスを手掛けるなど、ゾーンは常に音楽以外の表現形式への関心を示してきたが、これまで同時代の演劇と関連づけた評価は少なかった。

そこで本発表では、ゾーンと演劇との関わりの一例として、同じくニューヨークを拠点とし、アメリカ前衛演劇を代表する存在である劇作家リチャード・フォアマン (Richard Foreman, 1937-) と、ゾーンが共作したオペラ《Astronome》(2009)を取り上げる。ゾーンはキャリア初期からフォアマンと私的な交流を続けているが、現時点では本作が唯一の共同制作である。

フォアマンの主宰する劇団オントロジカル・ヒステリック・シアターで上演された本作は、1920-30年代に劇作家アントナン・アルトー (Antonin Artaud, 1886-1948) と作曲家エドガー・ヴァレーズ (Edgard Varèse, 1883-1965) が構想するも未完に終わった音楽劇《ひとりぼっち/天文学者》を着想源としたゾーンの同名の音楽作品を舞台化したものである。本作のもととなったゾーンの音楽作品は、彼が「聴く映画 (Aural Cinema)」と呼ぶ作品の系譜にあり、作曲者による架空の台本も存在する。本発表では、それぞれの証言や本作の映像を参照しつつ、ゾーンの構想とフォアマンによるリアライゼーションを比較検討することで、ニューヨークで活動する両者の美学の共通項、あるいは差異を提示する。

また、ゾーンは最初期のミュージック・コンクレート《メキシコの征服》(1973)で作品名を引用して以来、一貫してアルトーの演劇への強い共感を示してきた。この事実をふまえ、ゾーンが「アルカナと残酷劇の出会い」(Zorn; 2006)と表現するヴァレーズ/アルトーの音楽劇の製作プロセスの検証から、両者の目指した理想像を明らかにし、近年のゾーンのオカルティズムへの傾倒について、その源流の一つとしての位置づけを試みる。